

第3回

書道監修・執筆 加藤泰弘

はじめは臨書から ～漢字の書入門～

今回学ぶこと

書の古典を手本として学ぶことを「臨書」と言う。今回は楷書の古典の代表作品である「九成宮醴泉銘」と「孔子廟堂碑」を取り上げる。それぞれの古典のもつ特徴を捉え、「背勢」と「向勢」の筆使いの違いを理解して臨書する。また、文房四宝の一つである「筆」が作られる行程を知る。

学習前チェック！ 用語の意味を確認しておこう

点画／起筆／送筆／収筆／転折／筆使い／筆の穂

臨書ってなに？

中国や日本では古くから優れた書の作品が伝えられており、それを「古典」という。

「臨書」とはその古典を手本として学ぶこと。臨書のポイントは、ただお手本を写すだけではなく、書きぶりを読み取り再現することで、それぞれの古典がもつよさや美しさを感じ取ることである。どのような、力や速度、角度で筆が運ばれたかを想像しながら臨書していこう。

欧陽詢と虞世南

欧陽詢（557～641）と虞世南（558～638）はどちらも唐の四大家の一人である。二人とも学問に優れ、唐の太宗皇帝に重用された。

太宗は文教政策として「弘文館」を設置したが、二人は

今回のお手本



きゅうせいぎゅうらいせんめい  
九成宮醴泉銘  
欧陽詢  
(557～641年)



こうしびょうどうひ  
孔子廟堂碑  
虞世南  
(558～638年)

(拡大版は8、9ページ参照)

その学士として書の指導的役割を果たした。欧陽詢の代表作は、楷書の極則とされる「九成宮醴泉銘」。他に多くの楷書作品を残している。虞世南の残された作品は少なく、代表作の「孔子廟堂碑」も後に復刻されたものである。

## 筆ができるまで

筆は 10 段階以上の工程を踏む職人の技によってできあがる。

毛の選別作業の「選毛」から始まり、「火のし」「毛もみ」「毛そろえ」「寸切り」「塊」「練り混ぜ」「芯立て」「糸締め」によって穂の部分ができあがる。これを軸に差し込んで接着することで筆が完成する。

筆を大切に使うことで、自分の筆への愛着が生まれ、それは書の上達にもつながる。

### 達人からひとこと！

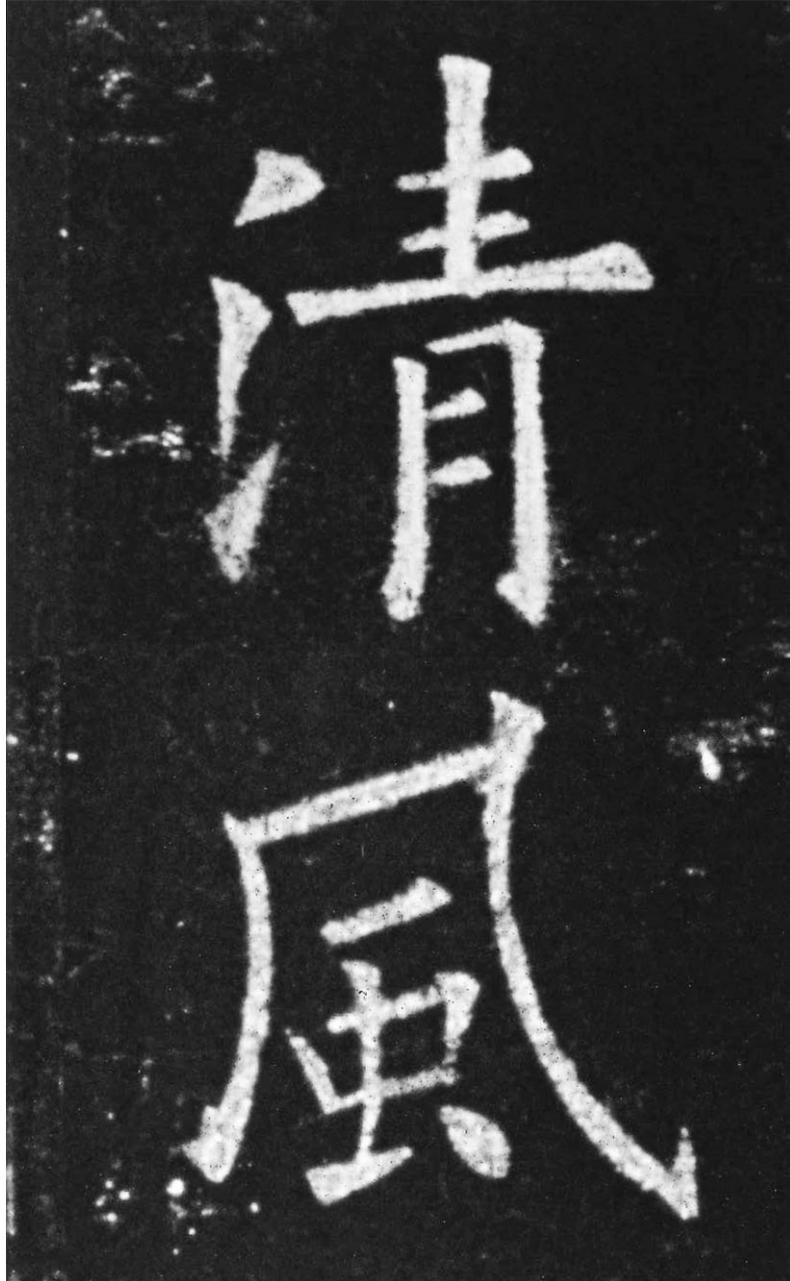
中国には漢字文化の長い歴史があり、さまざまな作品が伝えられている。これらの古典の「臨書」を通して、そのよさや美しさを感じ取り、その書きぶりを再現することで筆使いや形の取り方を身に付けていこう。今回は漢字学習の最も基本となる書体である楷書を取り上げた。謹厳で引き締まっている「九成宮醴泉銘」、穏やかで格調の高い「孔子廟堂碑」。この書きぶりの違いは、筆使いと「背勢」「向勢」といわれる形の取り方によってもたらされている。この二つの作品を出発点に、これからさらに、広大な書の世界に本格的に入り込んでいこう。



達人

加藤泰弘

九成宮醴泉銘



孔子廟堂碑



Handwriting practice lines consisting of ten horizontal dotted lines on a white background, intended for copying the characters from the image above.